時代を拓き　世界に貢献する人を目指して

Global View

2018 年 5 月 18 日　Newsletter 第 53 号 仙台白百合学園中学・高等学校　国際教育部

「インクルージョン」

国際教育部　Sr. 吉田 めぐみ（宗教科）

今から 20 年近く前に、複合文化国家オーストラリアの学校教育現場を視察したことがあります。その時に印象的であったのは、クィーンズランド州で行われていた「インクルージョン」でした。生徒たちには、文化的背景、言語、家族形態、ジェンダー、障がい、経済状況などの違いがありました。それまでは違いによって分けて教育をする傾向がありましたが、教育効果は上がっていなかったのです。某国際的学力検査の結果も何らかの改善を促すよう示唆していました。そのようなとき、「分けるのではなく違いのある生徒たちを一緒にしたときに、助け合い、協同しあって学習効果が上がる」という研究成果が発表されました。クィーンズランド州は、その「インクルージョン」型の教育を模索しながらも実施することに舵を切りました。視察をしたとき、すべてがインクルージョン・クラスではありませんでした。特質によって分けて実施した方が効果的な場合もあります。そこはうまく組み合わせる工夫をしていたと思います。

日本でもこの「インクルージョン」が導入されました。学級を核としたスタイルの日本の学校で、インクルーシブ型学級集団をつくり、協同的な活動を入れながら主体的な学びを促して人間的な成長と学力の向上を図る取り組みが行われるようになってきました。

仙台白百合学園で国際教育が行われてきた目的の一つに、異文化に触れて視野を広げることが挙げられます。海外研修は効果的ですが、国内でのグローバル・デイや国際理解講演会も効果的です。自分でできることを他者に任せて依存してきたことに気づいて、自分でするようになったという例があります。また、ホストファミリーに大切にされ、小さな努力も認めてくれるので、自信がついてきて積極的に明るくいろいろなことに取り組めるようになったという例もあります。日本では言わないで済ませてきたことも、海外のホストファミリーと過ごすためにははっきりと表現しなければ通じないことに気づき、言ったり書いたりして意志の疎通を図る努力をしたことによってホストファミリーとの相互理解が深まり、自分の第 2 の家族になったという例もありました。皆は慣れない関わりに挑戦し、自分の狭い殻を破りました。

特定の人（たち）とだけ関わり、その中で安定し、その安定を守るために異質と見做した人を排除したり攻撃する、人間的な未熟さが目立って問題視される昨今です。カトリック（普遍的）とは「いつでも、どこでも、だれにでも」という意味です。人間的な未熟さゆえに人を傷つけ、傷つき、徒党を組み、仲間外れを生み、利用価値で判断して関わる相手を決める、そんな社会の中にカトリック・ミッションスクールである白百合学園はいかなる人の尊厳も認め、受け容れ、相互の違いは学び合いのための宝庫でありお互いの視野を広げるものであると認めます。分け隔てなく大切にしあい、失敗から学ぶゆとりがあります。「グローバル」「インクルージョン」のもとはこのカトリックの精神です。この仙台で 125 年前から生かされている精神を、私たちは今日もまた生きて行くのです。